
M&A.

笹倉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M&am p;A.

【Nコード】

N7796Y

【作者名】

笹倉

【あらすじ】

「M a g i c a n d A b i l i t y」。魔力は平等である。能力は不平等である。「終わり」は何時か？ 「果て」は何処か？ 学園に答えはない。あるのは、「林檎」。そう、林檎のみだ。歯車は回る。魔力は流れ、能力は蠢く。死は近い。死は近い。近い。近い。学園に渦巻くのは何だ？ 林檎は嗤う——（魔法能力学園物です。中二病要素が割と入っています。小説タイトル募集中です。考えろ。お前の頭で。俺は無理だ）

四月一日／「嘘の新年」

四月一日／「嘘の新年」／入学式

モニターに学園長（？）が映し出されている。場内で新入生たちがざわついた。司会役の教頭がそれを鎮める。「嘘の新年」、入学式の毎年の恒例行事である。「学園長からの有り難いお言葉」と教頭に紹介され、モニターに映し出された学園長。その容姿は、林檎であった。正確に言えば、林檎がベースであった。林檎の中心に大きな目が一つ、ついている（まるでギリシャ神話のキュープロクスのような目だ）。それから、林檎の下の方に設置されているのは？ 埋め込まれているのは？ 表現の仕方は分からないが、とにかく何かがついている。機械だ。長方形の銀色の機械がついている。その長方形から右、左にそれぞれ四本。計八本の細い針金のようなものがついている。「足」だ。それがかしゃかしゃと音を立てて、モニターに映っている。その大きな目がまばたきをする。シャッター音のような音。

「四月馬鹿ども」
エイプリルフール

合成音声で、嘘に騙された人——新入生——に林檎が語りかける。
エイプリルフール

「入学おめでとう。諸君らは学園に入学を許可された。これから君たちには数千、数万もの魔法公式、魔方陣を覚えて貰うことになる。君たちの頭は埋め尽くされるだろう。脳メモリーの容量は空けてきたか？能力者諸君はまだしも、無能力者の諸君は大変な努力が必要になるだろう。もう死にたい！　だとか、殺してくれ！　だとか。そういう時には学園の優秀な教師陣に言うように。あらゆる手段、あらゆる能力、あらゆる魔法、あらゆる体術で、君たちを絞めて殴って切って煮て焼いて捻り切り磨り潰し――殺してくれるだろう。よく聞け、義務教育は終わった。君たちは魔力を持っているから此処に来た。もう遊びの時間は終わったんだよ。終わったんだ」

林檎中央の目が三日月状に歪む。笑っているのだ。

「以上をもって、異常を持って！　学園長からの有り難いお言葉とする。諸君、」

映像が消える。モニターは黒一色。

「今日はエイプリルフルだよ。全て、嘘という事にすればいいさ！」

合成音声だけ。

四月一日／＼A

七臣は溜息をついた。入学式が終了し、そのまま能力査定が行われ、クラスが割り振られて（能力の有無、性質などを考えて割り振られるらしい）、教室に入れたのが入学式から六時間後。既に時刻は三時頃だ。一時頃には帰れると思ってた、ともう一度溜息。それから、何故このA組だけ教室が五階の離れの離れなのか、とも溜息。他の一年生は四階、僕たちは五階じゃあ差別じゃないか、と七臣は考える。それから、七臣は周りを見る。十八人――七臣はカウントする。自分合わせて十九人。自分の後ろの席が一つ空いているだけだから、クラスの人数は二十人。みな大人しく椅子に座っている。入学一日目だから、こんなものか、と考える。

がらり、と教室の戸が開く。みながそちらに目を向ける。戸を開けた主――長身の女――は、「ひ！」と小さな悲鳴を上げた。みんなの注目を浴びて吃驚したのだろう、と七臣は推測する。長身の女は腰を曲げて、頭をぺこぺここと下げながら移動し、七臣の後ろの席へ座った。ショートボブの髪が少し揺れる。色白で、鼻筋が通っている。目は大きく、まつげは長い。唇は薄いピンク。

――さて、突然であるがここで七臣について説明しよう。

シチオミクロウド

七臣蔵人。十五歳。能力持ち。水系、氷系、縛系魔法が苦手（魔法はあまり得意ではない）。体術は得意。黒髪。髪型ツーブロック。眉にかかる程度の前髪。色は日本人の平均程度。右耳にピアス三個。舌にも一つ。左胸、右肩甲骨にタトゥーあり。あまり素行のいいよ

うには見られないが、性格は世間一般の不良のイメージのように、見栄っ張りだとか、派手好きだとか、そういったことはない。能力については今は記述しないが、生まれたときから能力を発現していた、^{ネイティブ}先天性。その他特筆すべき点はない。ないが、強いて言うなら――

――彼は超肉食系男子だった。

七臣は立ち上がる。椅子ががたりを音を立て、周りの注目が七臣に向く。後ろの長身の女生徒の机にだん、と手をつける。また、ひと小さな悲鳴をあげる女生徒。

「お名前は!？」

七臣は大きな声を出す。周りの生徒達が怪訝な顔をする。え、と長身の女生徒は聞き返す。お名前は!？ とまた同じ質問をする。女生徒はしどろもどろになりながら、答える。

「は、花村……夏木です」

「ナツキ!」

「は、はい!」

ナツキは思わず背を伸ばす。七臣はぐい、とナツキに顔を近付け

る。鼻と鼻が触れ合う位の距離だ。

「僕とセックスをしよう！」

七蔵ラヴメーカー人の不名誉な異名の理由は、ここから来ている。

「子作り」——入学初日に決まった、彼の異名の一つだ。

／「1－A」

四月一日／「1－A」

七臣が過激なセックス発言を行った直後に、前のドアが開いた。黒いファイルを持った男。身長は百七十前半と言ったところで、細い縁の眼鏡をかけている。スーツは安物であろう、とすぐに考えられるほど薄汚れた感じがする。年は四十代前半と言ったところか。非常に細く、針金のような手足をしている。頭はきっちり七三に分けている。教壇へ上がると、教室全体を見回し、七臣に「はい、ちょっと座ってね」と声をかけた。七臣はぱくぱくと口を動かしたが、そのまま何も言わず座った。喧騒は止まない。当たり前だ、入学して六時間後、初めて顔を合わせたクラス、誰かに話しかけようか、そう緊張している最中、突然セックスしてくれと叫ぶ男子生徒。辺りがざわつかない筈がない。ナツキはと言えば、顔を真っ赤にし、頭からぷすぷすと煙を出し、あわあわとしている。七三の男は「どうしたの？　なんかあった？」と教壇から近い生徒に声をかけた。それから、「ちょっとお話することがあるから、静かにねー」と教室全体に言う。三十秒ほどで静かになった。

「初めまして。学園に入学おめでとう。私は1－Aの担任をするところになった、山本博（ヤマモト／ヒロシ）です。担当学科は魔法全

てと魔方陣。皆さん、よろしく」

山本が教壇の上で礼をする。何人かは釣られて礼をした。礼をした後、「あ、博の字は博士のはか、の部分です」と付け足した。

「これからいくつか事務連絡をするんだけど、それ程多くないし、折角なのでもう少し私の事を詳しく知ってもらいたいなあ、って事で、まだ自己紹介をしようかなあ、と」

黒いファイルを机の上に置いて、チョークを持ち、黒板に円を書く。中に下向きの正三角形を一つ書いて、チョークを置く。

「さて、この陣が何の魔方陣か分かる人は居るかな？」

教室を見回すも、誰も答えるものは居ない。最初だから、手を挙げるのは恥ずかしいよねえ、と山本は笑い、それじゃあ当てちゃおうかな、とも言った。それじゃあ、と黒いファイルを開いて、中に挟んでいる名簿から目に付いた名前を口に出す。「陣織さん」

はい、と声がした。七臣の斜め右前の女。金色の髪が肩までかかっている。七臣の方からでは後姿しか分からない。と、言うより先ほども七臣は後ろしか見ていない。夏木の方だ。「メルアド教えてよ」「どこに住んでるの?」「好きな食べ物?」「兄弟とかっ

て居るの？」と小さな声で質問攻めをしている。ナツキは何も答えられず、先ほどから顔を真っ赤にしているだけ。クラス全体は気付いているが、山本はそれに気付かず、陣織さん、この魔方陣は？と質問した。

「ファイア炎です」

陣織、と呼ばれた女生徒は答えた。

「ファイアその通り。炎。ウオータ一番基本的な魔法だね。この三角形を上向きにすれば水だ。これ位の事は、魔力を持っていたら分かるね。遺伝子に情報が組み込まれているんだよ。生まれたときから知ってる。これは、ファイア炎だ。陣織さん、もう一つ質問するね」

山本はまた黒板に円を書く。それから、中に正六角形を書く。それから、一呼吸を置いて。ふっ、と山本が息を吐く。陣織はその息を音を聞いた。かっかつとチョークと黒板が触れる音がした。陣織は目を見開く。他の生徒も目を見開いた。え、と驚きの声を出す者も居た。この教室内で驚いていないのは山本本人と話を聞いていない七臣と夏木の二人だけであった。

「それじゃあ陣織さん、この魔方陣は分かるかな？」

先ほどまで円と正六角形しか書かれていない魔方陣が、変貌している。円の周りに読めない文字がずら、と並び円の内部には龍の紋章、読めない文字、その他諸々が書き込まれている。山本が一瞬で書き込んだのだ。山本はその細い目を少し歪ませながら、「今、少

し意地悪をしています」と微笑んだ。陣織は、分かりませんと答えた。

「うん、当たり前だよ。これは上級魔方陣だから、君たちの遺伝子情報に組み込まれていないから。でもこれ位の魔方陣なら、勉強すればすぐ分かるようになるよ。魔法学や魔方陣学は奥が深いけど、理解すれば簡単なんだ。奥へ奥へ行くなら、やっぱり難しいけどね」

黒いファイルを閉じて、チョークで書いた魔方陣を消す。それから前を向いて。

「君たちは魔力を持っている。能力を持っている人も居る。――あ、魔力と能力の違いを分からない人も居るかな？ それじゃあ説明しようか。時間もあるしね」

山本は魔法、能力と文字を書いて、その二つの間に縦線を一本書いた。

「魔力、と言うのは魔法を扱う力だ。魔法、と言うのは、魔力を持つている人間全てが使える。勿論魔力量や適正などの関係で使えない魔法もあるけど、理論上は、魔力を持っていれば全ての魔法が使えるんだ。能力は違う。能力、というのは個人個人によって違うんだ。持っていない人間も居る。だけど、魔力を持っていれば能力も持っている人間は居るけど、能力を持っていれば魔力を持っていけない人間は居ない。魔力は能力ありきなんだ。この学園では、そうだなあ、能力者の方が少し多い。一概に言えないけど、能力は魔力より強い。

殆どだ。例えばさっきの炎。^{ファイア}魔力を炎に変換する術だね。もし炎を発現させて操る能力者が居るとする。そうすると、同じエネルギー量で魔力で出した炎と能力で操られる炎。必ず魔力で出した炎が負ける」

山本は黒板に「魔法<能力」と書く。

「同じ炎の性質を持つ術で同じエネルギー量の魔法と能力がぶつかれば、間違いなく能力が勝つんだよ。魔法が能力に勝つにはどうすればいいか？ 一つは魔力量を多くすることだね。そうだなあ、魔力と能力のエネルギーをリングとする」

学園長のことだね、と微笑みながら、魔法と書かれたところにリングを一つ、能力と書かれたところにリングを一つ描いた。

「先ほど言ったとおり、これだと同じエネルギー量だ。能力は魔法に勝ち、魔法は能力に負ける。でも、」

山本は魔法の方にリングを四つ書き足す。魔法エネルギーのリングが五つ、能力エネルギーのリングが一つ、と山本が言った。

「これだと、魔力が勝つ。エネルギーの量が違うからね。でも、これは凄く非効率的だ。すぐに魔力切れを起こしてしまう。効率のいい方法は、相性のいい魔法を使う事。ジャンケンみたいなものだね。炎に弱いのは？ 水だ。^{ウォーター}水の魔法を使えば、注ぎ込む魔力はリング

二つ分で済む。これで、魔法は能力に勝てる。まあでも、それでも圧倒的に無能力者が不利、ということは変わらないね」

文字やリングを全て消して、両手をぱんぱんと叩いてチョコクの粉を落とす。

「このクラスにも魔力しか持たない、能力を持たない、無能力者の人が居るね。正直に言うけれど、この学園で無能力者に対する風当たりは強い。無能力者差別みたいなものだよ。でも大丈夫だ」

実はね、と山本は微笑む。

「私はこの学園の教師陣で唯一の無能力者なんだ。だからこのクラス内で無能力者差別は許さないし、この学園内でも許さない。もしそういう事があれば、私の所へ来てください。学園長が言っていたでしょう——私が、殺しますよ」

二十秒ほど沈黙が続いて、冗談です、と微笑む。山本スマイルだと陣織は思った。

「さて、それじゃあ自己紹介とかは終わり。事務連絡に入ります」

ファイルに挟まっていたプリント類を机でとんとん、と整えて、それぞれの机の列の一番前の生徒に配っていく。山本は配っていく途中に、後ろを向いている生徒を発見する。——七臣だ。名簿で名

前を確認して、「七臣くん、前を向いてね」と注意する。

七臣は前を向かない。「七臣くん？」と山本は問いかける。名前の読みが間違っているのかな、ともう一度名簿を確認する。名前の読みが合っている事を確認して、もう一度問いかける。

「七臣くん」

七臣はがたん、と机を鳴らして前を向いて。ピアスが揺れる。しまった、という顔をして。

「あ、はい。すみません。えーと……キャ、キャサリン先生？」

「山本です」

「すみませんキャサリン先生」

「私は山本です。事務連絡をするので配られたプリントを後ろに回して、プリントに目を通してください」

「分かりましたキャサリ「山本です」」

／「帰宅間際」

事務連絡が終了し、山本がプリントをまとめた。

「今日はお疲れ様。明日から授業を始めるから、しっかり教科書を持ってきて下さい。頑張ろう。私も頑張ります。それじゃあ、帰宅してください。気をつけてね。寮の場所は分かるね？ 分からない人は同じ寮の人を見つけて帰ってください」

また明日、と言って山本は外へ出て行った。ふう、と教室中から息をつく音が聞こえた。七臣はすぐ後ろを向く。

「どこの寮に住んでるの？ 何号室？ 今度遊びに行っていていい？」

「ええと、あの、ええと」

「ていうか今から暇？ もう四時だし、いい時間じゃない？ カラオケとか、どう？」

「その、ええと、あの、あ」

ナツキは気付く。七臣の後ろに立つ女と男。一人は陣織——もう

一人は赤髪の男。「カラオケとか行った事ない系の子？ そしたら僕んち来る？」と畳み掛ける七臣に踵落としを喰らわせたのは、陣織だった。え？ え？ とうろたえるナツキを尻目に、陣織は倒れた七臣のわき腹を革靴で思いつき蹴った。それから、ナツキを見て、初めまして、と微笑む。赤髪の男はいえ、倒れた七臣の頬をぺしぺしと叩いた。

「あたし、陣織。陣織少女」
ジンオリシヨウジヨ

「あ、え、あ、花村、花村夏木です」

「ナツキ、でいい？」

「あ、ええと、その、だ、大丈夫です」

「ナツキ、このエロ男と知り合いなの？ 急に立ち上がってあんなこと言うだなんて」

あたし、下ネタ、大嫌いなよね、とその金髪を指でまとめて、離れた。目、青い、とナツキは思う。

「ええと、知り合いじゃ、ないです」

「急に？」

「急に、です」

「変態じゃない、コイツ」

もう一度、げし、とわき腹を蹴る。うえ、と七臣が声を上げた。脳天を押さえて、七臣が立ち上がろうとする。赤髪の男が、無理すんなて、と止める。

「少女ちゃん、やりすぎちゃうのん？」
「いいのよ」

「いきなり踵落としするて、どうなん？」

「いいのよ、ていうか、貴方、名前は？」

「さっき言ってたやん、俺。入学式ん時に、少女ちゃんに声かけて」

「あたし利益のない事覚えらんないの」

「ひどいこと言うわあ」

「名前を言いなさいよ」

赤髪の男が手厳しいわあ、と笑う。

「筒木つづきや」

「下の名前も言いなさいよ」

赤髪の男の顔が曇る。

「……俺、下の名前コンプレックスやねん」

「いいから言いなさいよ」

「いや、コンプレックスなんやて」

「だから？」

「コンプレックス」

「え？」

「……啄木つづき鳥」

「え？」

「啄木つづき鳥！ 筒木啄木つづき鳥！」

別に面白くないじゃない、と陣織が言う。別に面白いなんか言うてへんけどね、と啄木鳥が口を尖らせる。ナツキは二人のやり取りを見て、何も言えない。七臣はようやく立ち上がる。それから、陣織に「君は誰だ」と問う。陣織は名前を答える。

「なんで僕に踵落としたんだよ」

「あたし下ネタ嫌いなもの」

「下ネタなんて言ってるやない。告白だ」

「うるさいわね」

「君はタイプじゃない。僕は黒髪の子が好きだ」
「うるさいわねコイツ」

「あ、俺もそれ思うたわ。黒髪の子、ええよね」

「コイツもうるさいわね」

「君、名前は？」

「俺は筒木」

「下の名前も教えてくれ」

「下の名前、コンプレックスやねん」

「教えてくれ」

「コンプレックスやねん」

「教えてくれ」

「コンプレックスやて」

「教えてくれ」

「コンプ「教えてくれ」」

「……啄木鳥」

「筒木啄木鳥。別に面白くない」

「あたしも思った」

「別に面白いなんか言うてへんっちゅうねん」

「そうだ、ナツキちゃん、カラオケとか」

「え、あ、ええと」

「ナツキ、寮はどこ？ 東西南北、どこの寮？」

「あ、え、ええと、西寮です」

「あたしもよ。なら一緒に帰りましょ」

「ちよお、俺も西寮やから、一緒に帰ろうや」

「キツツキは黙ってて」

「ナツキ、カラオケ」

「変態は黙ってて」

「七臣はどこの寮なん？」

「蔵人でいいよ。ナツキ、帰ろう」

「蔵人はどこの寮なん？」

「僕も西だ」

「ほんなら一緒に帰らへん？」

「僕はナツキと帰る」

「ナツキはあたしと帰るから。変態とキツツキで帰りなさいよ」

「ええやん、同じ西寮やろ」

「駄目。駄目よ」

「ナツキ、僕と」

わあわあと言いつつ合意になる三人。ナツキはおろおろと目を瞬かせながら、「い、一緒に帰りましょう！」と提案していた。

四月二日／「授業間際」

／四月二日／1－A

陣織が真っ青な顔でナツキと共に教室に入ってきたのを、啄木鳥は見た。七臣はナツキに「おはよう！」と声をかける。啄木鳥は、陣織に、「何か顔色悪いで」と話しかけた。

「キツツキ、あたしの部屋、霊が住んでるわ」

「はあ？」

「ラップ音がするの。ぎぎい、ぎぎいって！」

そうなん？ と啄木鳥は首を傾げた。ナツキに話しかけ続ける七臣を引き剥がして、ナツキちゃんの部屋からは聞こえへんのん？ と聞く。

「き、聞こえないの」

「ナツキちゃんの部屋、少女ちゃんの隣やんなあ？」

「そうなのよ！　なのにナツキの部屋からは聞こえないの」

ついでに言えば、啄木鳥の部屋と七臣の部屋も隣である。昨日一緒に帰宅して発覚したことだ。

「ほんなら、憑かれとるわ」

「やめてよ！　あたしお化けとか大嫌いなよ！」

「いやあ、憑かれとるやろ」

「で、でもわたしの部屋は大丈夫だよ」

「そういうのって、部屋に憑くからちゃう？」

「ちよっとキツツキ、やめてよ！」

陣織が、ばん、と啄木鳥の背中を叩く。

ここで七臣が口を開いた。

「陣織」

「なによヘンタイ」

「塩は試した？」

「塩？」

「ああ、盛り塩とか、言うもんなあ」

「僕は年に五十回以上金縛りにあうプロ金縛ラーだが」

「何よ金縛ラーって」

「盛り塩は、効くぞ」

「ホント!？」

「へえ、そうなんやあ」

ナツキ、今日の帰りに塩を買いに行きましよ！ と大きな声で言う。回りのクラスメイト達が何の話だ、と笑う。クラスは既にいくつかのグループに別れていた。七臣、啄木鳥、ナツキ、陣織のグループはクラスの中でもやかましいグループだ。啄木鳥が周りのクラスメイトに、ごめん、なんでもないから、と笑いながら言った所で、始業のチャイムが鳴った。朝のショート・ホーム・ルームだ。山本ががり、と戸を開けて現れた。服装が昨日と全く変わっていない。

「おはようございます。椅子に座って下さい。——うん、全員出席だね。それじゃあ、連絡。今日、一時間目から、いきなりだけど、教育実習生の子が授業するから。魔法学。教科書、持ってきてます

よね？ 教育実習生の子が授業してる間、私は後ろで見えますから。しっかり授業を受けるように。寝てたら起こしますから。んー、後は特にないかな。あ、二時間目からはクラスタイムだ。それくらいかな。以上！」

それじゃあ後でねー、と山本スマイルを残してから、教室から出て行く。

ナツキが、クラスタイムって、何かな？ と口に出した。七臣が、分からないなあ、と言って、右斜め前の陣織に聞く。

「クラスでの戦闘演習よ」

「戦闘演習？」

「皆の魔法とか能力とか、見せ合うんじゃないかしら」

それからうだうだとその三人で喋る。七臣は啄木鳥を見る。啄木鳥は啄木鳥の席の周りの人間と談笑していた。

チャイムが鳴る。クラスの人々は魔法学の教科書を机から出した。ナツキが、あ、と声を漏らす。

七臣が後ろを向く。

「どうしたの？」

「――きよ、教科書、忘れちゃった」

／「授業と差別」

教壇に立ったのは身長の小さい男だった。黒縁眼鏡をかけている。まだ若い。鼻が大きく曲がっており、目が小さい。えらい性格悪そうなん来たな、と啄木鳥は思う。

教室の後ろの方のドアから、山本が現れた。何人かがそちらを向くが、山本が「前を向いて」と指で前の方を指すジェスチャーをしたので、前を向く。小さい男が口を開いた。

「授業を始めます。教科書五ページ」

紙と紙が擦れ合う音がする。ナツキは、どうしよ、どうしよ、と小さな声で言っていた。七臣がバレルまで座ってなよ、と助言すると、でも、とナツキが言う。マジメなナツキが好きだ！ と七臣は叫びそうになったが、耐えた。

「それじゃあ音読。出席番号十五番、花村夏木。読んで」

びく、とナツキが体を震わせた。椅子が揺れる。それから、小さな、か細い声で、「教科書を忘れました」と告げる。

小さな男——教育実習生——は、眉をぴくり、と動かし、はあ？と言った。

「よく聞こえなかった。大きな声でもう一度」

ナツキは顔を真っ赤にして俯きながら、教科書を、忘れました、

と先ほどより少しだけ大きな声で言う。はあ？ と先ほどより大きな声で小さな男が言う。性格悪い、こいつ。と陣織は思った。

「きよ、教科書を、忘れました……っ！」

ナツキが教室中に聞こえる程度の声で、言った。

小さな男はチ、と舌打ちして、名簿を開ける。

「忘れ物は、チェックするから」

そうして小さな男はボールペンで何か名簿にチェックを入れた。それからもう一度ぱらぱらとファイル内の書類をめくる。生徒達は何を見ているか分からなかったが、山本は何を見ているか分かった。生徒の個人データだ。身長、体重、能力の有無などが書かれているもの。

「花村さん」

ファイルに顔を近づけて、小さな男が言った。

「君は、無能力者だね？」

ナツキの表情が変化する。下唇をかみ締める。両手をぐ、と握る。

「君は僕たち能力者から劣っているんだから、こういう所でしっかりしないと。忘れ物なんて論外だ。そうだろう？」

小さな男は教壇から言う。ナツキは俯く。顔が真っ赤だ。なんと

か言ってみろ、と小さな男が言う。ナツキは何も言わない。

——この時点で七臣は爆発寸前だった。

てめえこの野郎僕のナツキに何言ってくれてるんだ殺すぞ殺すぞ殺すぞ殺すぞ殺してやる、今、立ち上がって、教壇まで行って、ぶん殴ってやる、それから、それから、まだ殴って、目を、目を抉って、それから、それから——！

立ち上がろうとしたその時、七臣は山本と目が合った。その瞬間、七臣は動けなくなった。

(何だこれ……！?)

魔法をかけられた訳でもない。能力でもないはずだ。山本は自分で「無能力者」と言っていたから。動けない。目が合っただけで。何だこれ、ともう一度考える。理由は分からない。考えても、分からない。

そんな七臣の事情は知らず、小さな男はナツキの言葉を待つ。ナツキが何も言わない事を確認して、だから無能力者は、と吐き捨てた。それじゃあ音読はいい、各自目を通せ、と言葉を続けた。

「すすきの薄野くん」

山本が口を開く。薄野と呼ばれた男、小さな教育実習生が、はい、と返事する。

「突然ですが時間割変更です。薄野くんには、第一闘技場で、私と能力有り魔法有りのスパーリングをして貰います」

はあ？ と薄野が言う。

「スパーリング、と言っても、本気で来て頂いて構いません。第一闘技場は今開いているはずですから、先に行ってください」

しかし、と薄野が言い返す。山本は、いいから、と言う。

薄野は何か言いたげだったが、ぶつくさ言いつつ、ファイルと教科書を畳み、教室から出て行った。

出て行ってから数十秒後、山本は前の方へゆっくり歩いていき、教壇の上へ立った。

暫く口を開かない。なんとも言えない緊張感が教室を包んでいた。七臣は既に動けるようになっていたが、動く気になれなかった。

「皆さん」

山本が口を開く。

「私は昨日、言ったばかりです。『差別は許さない』、と。花村さんは無能力者です。それだけのことです。無能力者だから何か問題があるんですか？ 無いです。何も。薄野君はそれを分かっているなあ」

何故彼が教育の道に進んだのか分からないです、と山本は言う。

「これから私が闘技場で見せるのは能力者対無能力者の戦いです。もしかしたら負けちゃうかもしれないなあ。でも、頑張りますから。それじゃあ皆さん、移動してください。私は花村さんの為に戦いますよ」

恋人かいな、と啄木鳥が笑う。

ここですよやっとな七臣が僕がナツキの恋人だ、と声を出した。

そ、そんなことないです、とナツキが声をあげて、クラスの緊張が和らいだ。

／「能力無能力」？

／「能力無能力」

「二十人、全員来てる？ うん、来てますね。あ、これ、見えますか？ 薄い青色の膜。これ、『転生』の魔法膜です。見たことないでしょ？ レア物ですよ。この膜の中でもし死んでも、膜の外で生き返ります。すごいでしょ？」

山本スマイル。

「それじゃあ、私は行って来ます。薄野くんはもう中に入ってますね。気合十分です」

山本スマイル。

ゆっくりと闘技場の中に入っていく。膜が山本を包んで、離す。闘技場は半径五十メートルの円で、その平面にできた円を「転生」の魔法膜が包みこみ、立体の半円となっている物である。また、闘技場内の音声は全てスピーカーから闘技場外の人々にクリアに聞こえるようになっていた。

「薄野くん」

「なんですか」

スピーカーから山本と薄野の声がする。

「私は無能力者です」

薄野は露骨に顔を顰めた。差別主義者の顔は総じて醜いなあ、と七臣が言う。啄木鳥が、あの顔はあかんわ、と笑う。

「教師が無能力者ですか、世も末だ。人材不足ですか？」
「まあ、そんな所です」

はは、と山本が笑う。手に持った黒いファイルを撫でて、眼鏡の位置を修正する。首を左右に動かして、回す。メアリー先生強そうには見えないな、と七臣が言う。山本先生ね、と陣織がすぐさま訂正した。

「用意がいいなら始めますが、山本先生」
「はい。そうしましょうか。どうぞ、ご自慢の能力を私に見せてください」

薄野が醜い笑みを浮かべた。それは差別の笑みで、嘲笑の笑みで、侮蔑の笑みだった。薄野は片膝をつく。地面を撫でる。

「――無能力者が、ボクに楯突くなよ！」

薄野が吠える。

地面が割れる音。

闘技場の石でできた床が「それ」によって崩れる。「それ」は床を貫通し、生えてきたのだ。「それ」を見た瞬間、山本も、生徒全員も、ある物を連想していた。ナツキは顔を真っ赤にして倒れ、陣織は「破廉恥よ!」と叫んで闘技場に背を向けた。七臣は呟いた。

「男性器に酷似しているね、あれ」

「それ」――闘技場の床を破壊し生えてきた六本の触手。横幅一米ートル七十センチ、縦幅二十メートルほどの触手が踊るように蠢いていた。最低の能力やなあれ、と爆笑しながら言う啄木鳥に、陣織は言葉にならない罵声を浴びせた。男子生徒は殆どが爆笑し、女子生徒は笑う者と憤慨する者と気絶するナツキに分かれた。

山本が、教育に悪いなあ、と六本の触手を見上げながら言った。薄野が笑う。

「能力名、インセクト六本の触手。どうだ、ボクの可愛いペットは？」

山本が答えづらそうな顔をして、それから苦笑した。

触手には白色の粘液が付着している。――毒だ。触手には神経毒が付着しており、その触手の質量に潰されても終わりだが、避けても飛散する神経毒に触れば動けなくなる。薄野は勿論この事を言わない。潰されないように精々逃げ回れ、とほくそ笑む。

「押し潰せ、インセクト六本の触手！」

触手が後ろに撓り、それから山本を目掛けて倒れこんでくる。啄木鳥が、おい！ と声を出した。山本が避ける素振りを見せない。啄木鳥の声のトーンのせいか、陣織も振り返って闘技場を見る。女生徒の短い悲鳴が聞こえる。山本がゆっくりとファイルを開く。それから、笑う。山本スマイル、と陣織が呟いた。

「それでは授業を始めましょう」

／「能力無能力」？

山本が黒いファイルに手をかざす。

「^{カット}斬」

ずりゅ、と音がした。その後、びち、と音がした。びち、びち、びちびちびちびちびちびち！ 薄野が悲鳴を上げる。

触手が根元を残して倒れる。派手な音がした。触手が痙攣しながら、その白い粘液——神経毒を飛散させる。山本は神経毒を器用に避けて、倒れた触手を覗き込んだ。

「^{カット}斬の魔法です。簡単な魔法ですから、君たちにもすぐできますよ。後五本残っていますし、ゆっくりやっていきましょう。あ、ついでに今のやり方は非常に燃費の悪いやり方です。こんな大きいおちんち——いえ、触手を、低級魔法の^{カット}斬で切り倒すには、それなりに大きな魔力を注ぎ込まなければいけませんから。何故この魔法を使ったと言うと」

生徒の方に黒いファイルの中を見せる。^{カット}斬の魔方陣が書き込まれた紙だ。一番上にこの魔方陣があったんですね、と笑う。

薄野が半狂乱になりながら、何かを叫んでいる。内容は支離滅裂

で、無能力者が生意気な、だとか、ボクのペットをよくも、だとか、
そういった物だった。

「インセクト六本の触手！ 一斉に叩け！ そいつを、そいつを殺せ！」

残り五本の触手がしな撓る。先ほどと同じ動きだ。

折角だし、もう一つ燃費の悪い方法を紹介しましょうか、と山本は言う。ファイルを閉じて。

「七臣君、先ほどの技です。しっかり見ていてください」

七臣の目が鋭くなる。蔵人、なんのハナシ？ と啄木鳥が言うが、
さつきちよつとね、と適当な返答をして。

山本に触手が迫る。動かない。迫る。動かない。迫る。動かない。
迫る。動かない――！

「死ね、クズ！」

薄野が吠える。最初に叫んだときとは違う、焦りや不安をちらつかせる声だった。

触手が山本を押し潰す――！ かと思われた。山本まで残り一メートルと少し位のところで、触手が止まる。どうした！？ と薄野が叫んだ。山本が笑う。

「魔力障まりよくあててですよ」

魔力障て――

通常、魔力はなんらかの形に変えて（炎や、水）、相手にぶつけるものである。何故変化させる必要があるのか？ 魔力の消費を抑える為である。魔力を人間界に存在する既存の物に変化させることによって、魔力を抑える。炎や水、それぞれの持つ自然エネルギーで、ある程度の魔法エネルギー（魔力）を代用することが可能なのである。しかし、魔力障てとは、魔力をそのまま相手にぶつける――即ち魔力を具現化する。魔力は人間界には存在しないものだ。炎の持つ自然エネルギーを5とする。威力10の炎魔法を使う為には、不足分の5を魔力で代用する。自然名魔法の形だ。しかし、威力10の魔法障て、これは「10」、全て自らの魔力を放出しなければならぬ。魔力障ては簡単に使えるものではないのだ。

しかし、やってのけた――。

しかも、「能力」で使役されている触手五本を止める程の威力の魔力障て。圧倒的な魔力量が必要であるのは明白であった。

これは疲れますね、と山本が笑う。触手は動かない。薄野は能力名を叫び続ける。ゆっくりと山本が後ろに下がり、触手との距離をとる。

「皆さん、これから三十秒ほど時間を与えるので、一番燃費よく触手を止める方法を考えてみてください。用意、始め」

山本が言う。十二回、能力名を叫んで、ようやく薄野の触手が動き始める。山本がそれを軽い身のこなしで避けた。黒いファイルは閉じている。

「燃費のいい方法」

七臣が言って、それから、陣織の顔を見る。

「氷魔法あのゲテモノを全部凍らせればいいんじゃないかしら」

陣織はナツキの顔を見る。ナツキは未だに気絶したままだ。啄木鳥の顔を見る。

「え、俺？」

「そうよ、何か案出さないよ」

「僕はあの触手を射精させればなんとかできるとおも」

「ちよっと黙っといってくれへんか、蔵人」

「死んで頂戴変態」

「分かった、黙る」

「それで、キツツキ。何か案を出さないよ」

「取りあえず氷魔法で全部凍らせる、いう案は絶対じゃないわ。それこそ魔力めっちゃ食うやん」

「でもあたし氷魔法得意だし」

「僕だって射精させるのはとく」

「黙っといってくれ蔵人」

「黙ってて変態」

「俺やったら――」

「何？ どうするの？」

「あのチビを叩く。多分アイツが気絶すれば触手は動かん。根拠は『能力名の詠唱』や。アイツはさっき山本センセに魔力障てされたあのチンポにずっと能力名を叫んだ。多分あの触手は能力名の詠唱で動くようになった。だからアイツを叩けば触手は止まる。もしあれが魔界から召喚されたモンやったら術者が気絶したら魔界に

帰るやろう。もしあれが具現化されたもんやったら多分消える。まあないと思うけど、あれが人間界に存在するモノで、それをアイツがラジコンみたいに動かしてるモンやとしたら、まあ動きは止まるやろう。以上」

「三十秒。正解が出ましたね。筒木君、正解です。あ、君たちの声はこちらに聞こえるようになってるんですよ」

闘技場を見れば、山本が笑っている。薄野が山本の足元に倒れており、触手が無くなっている。あれは、魔界からの召喚物です、と山本は説明する。いつの間に倒してん、と啄木鳥が言うと、山本はそれに答えずただ微笑みを見せるだけだった。

チャイム。

「授業終了です。長い一時間目が終わりました。さあ、休み時間です」

四月五日／「怪奇とテスト」

／四月五日／1－A

「止まらないわ」

何が？　と今日から解放された購買で買ったパンの封を開けながら、七臣は言った。クマ、すごいなあ、と啄木鳥が笑う。目の下にくっきりとした隈が表れている陣織は充血した目を瞬かせながら、「ラップ音よ」と答えた。時刻は一時十三分、四時限目の授業が終わり、昼休みの中頃である。入学早々、七臣のセックス発言、教育実習生の無能力者差別、そして山本が教育実習生と戦闘の三つの事件が起きたA組であったが、荒れる事はなく、その後は穏やかな時間が流れていた。しかし、その中でも七臣・陣織・啄木鳥・ナツキのグループは騒がしい。

「ラップ音で、この前言うてたヤツ？」

「そーよ……あたし、どーにかなっちゃう」

「やっぱアレなんかなあ、霊なんかなあ」

「やめて！　やめなさい！」

あたしには聞こえないんだけどなあ、とナツキ。ナツキちゃん、霊感無さそうやもんな、と啄木鳥が笑う。あたしにも無いわよ！と悲鳴を上げる陣織。

「盛り塩はしたのか」

「したわよ、至る所に！」

「あれって部屋の四隅にするもんちゃうん？」

「至るところにしたら、意味がないだろう」

う、うるさいわね！　と大きな声を出す陣織の顔は赤い。

「とにかく、あたしはラップ音のせいで全然寝られなかったの！
盛り塩用意するのに大変で勉強もできなかったの！」

「勉強って、お前意外と真面目なんだな」

「何言うてんの、蔵人。今日魔方阵の小テストやで？」

パンを頬張ったまま七臣の動きが停止する。知らなかったん？
と啄木鳥。変態は馬鹿ね、と陣織が笑う。あたふたとしたナツキが、
今からでも遅くないよ！　とフオローした。七臣がフリーズから回
復し、口を動かし始める。パン屑がボロボロとこぼれた。食い方が
汚い、と啄木鳥と陣織が同時に言う。七臣はパンを飲み込んでから、
いいコンビだな、とため息をついた。

／四月五日／1－A

啄木鳥がテストを解いている。

陣織が少し険しい顔をしながらテストを解いている。

ナツキがテストを解いている。

七臣が鉛筆を転がしている。

／四月五日／1－A

「二十点満点の小テストですから、16点くらいは取ってほしいかったなあ、と思っています。それじゃあ返却です。番号順に取りに来てください」

帰りのショートホームルーム、山本が教壇に立って、一人一人にテストを返却している。ナツキが、16点、取れてるかなあ、と心配そうに言った。

「16点以上取れてたら僕と寝よう」

「そ、それは違うと思うな」

「16点以下だったら僕とセックスしよう」

「い、意味、同じじゃないかな？ 七臣くんは、できた？」

「鉛筆を転がしたよ」

ナツキが首を傾げながら、選択問題は無かったよね？ 全部魔方阵を書く問題だったよね？ と聞いた。

「そうだね。だから問題用紙には何も書いてない」

七臣君、取りに来てください！ と山本の声がする。七臣はゆっくり立ち上がった。

／二者面談

「やらかしましたねえ、七臣君」

放課後の1－A。窓からは夕日が差し込んでいる。七臣は椅子に座りながら、魔方阵は苦手なんです、と答えた。山本は苦笑しながら、駄目ですよ、覚えればいいだけなんだから、と言いながら、七臣の正面に座った。

「キャシィ先生」

「山本です」

「何故僕は放課後の教室に残されたんでしょう」

「小テストがゼロ点だったからです」

「僕は今から何をされるんでしょうか。猥褻な事でしょうか」

「猥褻な事はしません」

「録画して投稿するんですか？」

「どこにですか」

「まだ服は脱がないほうが？」

「まだ、と言うか脱がなくても結構です」

制服に手をかけた七臣を制して、山本が、「すみませんでしたねえ」と言った。眼鏡が夕日を反射している。七臣は山本の目を窺えない。何がですか、と七臣がぶっきらぼうに聞く。分かっている癖に意地悪だなあ、と山本が頭を掻く。

「魔力障まりよくあててです。まだ謝っていなかったでしょう。すみませんねえ」

七臣は山本の顔をじっと見る。山本は少し首を傾げて、しかし七臣から目を逸らさない。

——実の所、七臣はキレていた。

（このポケメガネあのクソチビチンコは僕がボコボコのギツタンギツタンにする筈だったんだのにこのポケメガネつまんねえやり方で終わらせやがってあのクソチビチンコもどっか行っちゃまったじゃねえかこの野郎僕がナツキにいいトコ見せる筈だったのに僕がナツキにいいトコ見せる筈だったのに畜生畜生畜生畜生！！）

七臣が山本を睨みながら思考に耽っていると、山本が口を開いた。

「七臣君は、私に勝てると思っているでしょう」

七臣は暫く考えてから、「そんな事は」と答えた。目は逸らさない。そうですか？ と山本が笑う。

「口から漏れてましたよ、『このメガネ』とか、聞こえました」

「漏れてましたか」

「勝てると思ってるでしょ」

「正直思ってます」

「魔力障まりよくあてで、モロに当たったのに」

「あれに当たっても負けたと言う事にならないでしょう」

「負けず嫌いですね、七臣君は」

「よく言われます」

ふ、と山本が息を漏らす。

七臣は考える。思考を張り巡らせる。山本はファイルを持っていない。魔方阵を手元に置いていない。魔方阵は魔法の詠唱を短縮するために生み出されたものだ。今、もし、僕が山本に攻撃を仕掛ければ？ 僕の右ストレートが山本に届くまでに山本が魔法を詠唱することが出来るか？ 否。魔法の詠唱を省略する事も可能である（威力は下がるが）。しかし、魔力を練り、放出する――僕の攻撃の方が圧倒的に早い。例えば学園の教師であろうと。やれる――！

「駄目ですよ、教師殴るなんて」

山本の一言で、七臣は現実に戻される。くすくすと山本が笑う。それから、立って椅子を見てください、と七臣に言った。七臣はその通りにする。

椅子には、魔方阵が書かれていた。

「――僕の尻の下に魔方阵ですか」
シンパシー

「受信の魔方阵です。今日のテストに出てましたよ？」

「エッチですね」

「何がですか？」

山本は椅子の魔方陣をそこらからとった雑巾で拭き取りながら、言う。

「座る椅子に何か仕掛けられていないか考えないようなヒョッコ生徒には私はまだ負けませんよ。精進あるのみですね、七臣君。そうでしょ？」

「――勝てないのが分かっているけど戦わなければいけない時があります」

「キレイないで下さいよ。君には少し特別な事をやって貰います。小テストゼロ点の罰ゲームですね」

何をすればいいんですか、と七臣は静かな声で言う。

山本は椅子の魔方陣を全て拭き終え、立ち上がる。それから優しい声音で言った。

「林檎狩りですよ」

／七臣蔵人の「林檎狩り」？

／「林檎狩り」開始より二時間

七臣は疲弊していた。魔力も枯渇寸前で、足も動かない。まずい――七臣は考える。如何に「それ」に攻撃を与えるか。七臣の能力は「それ」の攻撃を避けるのに非常に効果的ではあった。ただ、攻撃を当てることはできなかった。開始から二時間、パンチ、キック、魔法、掠りもしなかった。ちくしょう、七臣が小さく呻く。それを聞いた「それ」――

――林檎は、笑った。

「もうお疲れか？ このクズ」



――「林檎狩り」。

この学園における教師の最終試験を呼称するものである。つまり、通常は生徒が行うものではない。内容は非常に明快なのだが、少々説明を先にしておく。

「学園長」――林檎の事だ。

学園長は林檎（に機械がついたもの）であるが、勿論林檎そのものではない。あの林檎は「受信機」だ。学園長はあの林檎に受信の魔法陣を書き込んだ紙を貼り付けている（「受信」の魔法には二種

類有る。「思考」の受信と「魔力」の受信)。そして、魔方陣によって受信した魔力で、林檎を動かしているのだ。

内容に戻ろう。林檎狩りの目的。「受信」の魔方陣が書き込まれた紙を林檎から剥がす(燃やす、濡らす、破る、等も良し)、または林檎そのものを破壊する(「動作する事を不可能にすることを破壊と呼称する」)。

先ほど記述したように、林檎は学園長の魔力で動いている。しかしこの場合の遠隔操作は学園長の意思を必要としない自動型である。故に、攻撃パターンが決まっている。

?自分を中心とした円1m以内に何かが入ってくれば動作を開始する。

?使う魔法は「炎」・「水」のみ。

?ランダムに学園長の言葉が再生される。

この三つである。

余談だが、この林檎狩りは合格までの時間が計られている。山本はこの林檎狩りを二分三十五秒でクリアした。



／「林檎狩り」開始一分前

ドアを開け、入る。

山本に案内されたのは広さが教室と同じくらいで、窓が無い部屋だった。照明がついている。部屋全体が真っ白だ。白い壁紙、白い床、白い照明。いや、と七臣は思う。

赤だ。血を零したような赤。

部屋を中心に八十センチくらいの台が有り、その上に、林檎。「学園長」だ(正確には学園長が動かす受信機)。林檎の中心にある

目は閉じている。既にこの「罰ゲーム」の内容を七臣は聞いていた。林檎を観察する。紙は確かについていた。これを剥がせばいいのか、と七臣は確認する。一度深呼吸。そして、踏み込む。「1 m圏内」。

林檎の目が開く。

「ゲーム開始だ。着いてこれるかひよっ子さん？」

／七臣蔵人の「林檎狩り」？

跳ぶ林檎！ 垂直に3メートル程飛び上がる。

七臣は後ろに下がる。使う魔法は「炎」と「水」のみ。下級魔法二つだ。魔法を放った直後に叩く。七臣の思考は固まっていた。しかし、打ち碎かれる。

林檎の目の部分に「炎」の魔方陣が映し出される。来る！ 七臣は構える。それは炎を避ける体勢であり、直ぐに迎撃に向かう体勢でもある。七臣は確かに聞く。学園長の言葉。

「――焼却処分だ」

轟！

七臣は反応していない。それは、「避けよう」と思って体が動いた訳ではない。「危険」――エマージェンシーシグナル。本能的に、そう、結果として、避けた。避けることができた。

――速すぎる。

魔方陣が映し出され、炎が発現された時には既に目の前にあった感じだ。七臣は回想する。そして、気付く。冷や汗。七臣は探る。

――迷彩モザイクの魔法で炎を一瞬だけ見えなくしたのか？
しかしそれなら何故迷彩を僕の目の前で消した？
と、言うより迷彩モザイクをどうや

って発動するんだ？ 使う魔法は炎と水のみ。この条件が必ずしも正しいと言う訳じゃない。山本が嘘の情報を流した可能性もある。しかし、どうやって発動する？ 魔方陣は目に映し出された炎のみ。その他視認が可能だったのは受信の魔法陣のみ。迷彩の詠唱は聞こえなかった、というより迷彩を詠唱するヤツは頭が足りてない（迷彩の魔法は魔法を一時的に視認し辛くさせる魔法。詠唱して「唱えた」と相手に感付かれてしまえば、その効果は薄くなる）。ならば、そもそもの魔法速があノスピード？

飛沫！

七臣は絶叫する。右足の甲に風穴。思考に耽りすぎて林檎の動きを追えていなかった。水の魔法が七臣の右足の甲を貫いたのは当然の結果であるか？ 否、そうではない。七臣の戦闘センスは優れている。並の相手なら例え思考に耽っていようが文庫本を読んでいようが攻撃、魔法を避ける事は可能なのである。

誤算は、相手が林檎だという事。

七臣は左に転がるようにしてその場から離れる。林檎は追撃しない。白い床をその針金のような足でとことと動く。台詞再生、「学園長様を崇めろ」。

七臣の右足から血が流れている。畜生、利き足じゃないか、と七臣は漏らす。それからゆっくりと立ち上がり、その感触を確かめる。――痛い。体重を右足にかけて移動するのは辛い。七臣は確認して、深呼吸。

――やるしかない。

七臣の頬を冷や汗が流れる。それを袖で拭って、七臣は不適に笑う。

「――スロウテンポ歩く速度」

／七臣蔵人の「林檎狩り」？

スロウテンポ
歩く速度。

七臣の能力の一つである。

そもそも七臣はこの能力を好んでいない。燃費が悪いのだ。長時間使用すれば、体の動きが鈍る。疲労が溜まる。七臣の戦闘スタイルは近距離の肉弾戦である。しかし、林檎相手には叶わない。第一にサイズが小さすぎることに。第二に相手の動きが素早いこと。第三に魔法攻撃の速度、威力が異常なこと。

使わざるを得ないのだ。

攻撃魔法で紙を剥がす、という案も七臣の中には出ていた。だが、即却下。七臣は魔法が苦手である。苦手、というより、性に合わない、と言ったほうが正しいか。七臣は自分が頻繁に使用する五つ程度の魔法以外は殆ど使えないに等しかった。使える魔法も、林檎には届かないし、使えないものばかり。

七臣は決心し、発動した。能力、スロウテンポ歩く速度――

林檎が目にも魔方阵を映し出す。「炎」。「炎」↓「水」↓「炎」↓「水」の順に魔法を発動しているのか？ と七臣は推測する。しかし、もう関係ない。スロウテンポ歩く速度の前では。

炎が発現する。七臣はその場を動かない。放たれる、炎！

轟音を上げ、凄まじい速度で七臣へ向かって！

――来ない。

炎はふわふわと、非常に遅いスピードで、七臣の方へ向かってく

る。先ほどの速度が嘘のように。

スロウテンポ
歩く速度。

魔法によって放たれた魔力のスピードを十八分の一のスピードに
してしまう能力である。

制約という制約もない。範囲も広く（自分を中心として半径百メ
ートルの円内）、多人数を相手にした場合も使用できる能力。

七臣は魔法の速度を見て笑う。

「どうした？ 随分間抜けな魔法だな」

林檎も笑う。

目を三日月状にさせて。



／「林檎狩り」開始より五十分

山本が暗い部屋でモニタを見ている。口の角を上げて。

「歩く速度。——中々いい能力ですね。私みたいな『魔法使い』に
は非常に怖い能力だ。でも、もう五十分。君の攻撃は当たらないね、
七臣君。体術のセンスもいいけど、林檎にはそれじゃあ当たらない
よ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7796y/>

M&A.

2012年1月8日12時50分発行